

男女共修によるダンス授業に関する研究

— ダンスにおける楽しさの変容を中心に —

東原芳美・川口千代・中村なおみ*

A study on a dance class of coeducation

— Focusing on the changing of factor on enjoyment in dance —

Yoshimi HIGASHIHARA, Chiyo KAWAGUCHI and Naomi NAKAMURA

The purpose of this study was to analyze the factor on enjoyment in dance classes, and to clarify the process how the dance enjoyment had been changing, and the differences between males and females. Subjects were junior high school students in coeducation, which practiced by "the learning of problem solving in dance".

The results were processed with factor analysis. 7 factors were extracted and were entitled in the both former and middle learning terms. After learning, 6 factors were extracted.

Main findings were as follows:

1) The factor on enjoyment in dance classes have changed in accordance with the aim of that class. Therefore it inferred that "the learning of problem solving in dance" seemed to be appropriate for coeducation.

2) In the both former and middle learning terms, males feel the higher degree of the enjoyment of rhythmical movement and appreciation in dance than females. Also after learning, we obtained the similar results. Furthermore males feel the higher degree of the enjoyment of achievement.

As the result of this study, it is indicated that we need to take the characteristics of sex differences into consideration in teaching dance with the method of "the learning of problem solving on dance". Furthermore we have to consider the individual differences in dance class.

Key words: "The learning of problem solving in dance", Factor analysis, The enjoyment in dance, Characteristics of sex differences

1. はじめに

(1) ダンス課題学習について

近年、松本らにより舞踊の構造・機能が明らかにされ、さらに要素化された。⁽⁹⁾そして要素化された各項目から学習内容とすべき課題が抽出さ

れ、学習方法が段階化された。⁽⁹⁾舞踊の構造化からは、ダンス学習において「動きの探求、表現の探求、作品の探求、鑑賞の探求」⁽⁸⁾の4分野が設定された。そしてその指導については「舞踊学習では学習内容自体が、創るという自発性、創造性を含む内容をもっており、子供たちが学習課題に進んで取り組み、課題を解決するような問題

*筑波大学附属中学校

解決型の学習が主体となることが多い。舞踊学習は、子供たちの主体的な課題解決学習を本体としながら、そのために必要な基礎の系統的な運動技術の学習を、あわせもつものと考えらるべきであろう。⁽⁸⁾と、課題解決と系統学習のあり方が明らかにされている。ダンスの課題解決学習は「1920年頃に導入された問題解決学習をふまえ、1950年頃から体育に導入された小集団学習の成果をふまえ、じかに舞踊の本質に接近する内容と方法の設定」⁽¹⁰⁾である。

学習内容としての具体的な課題として「運動課題(動きからイメージへ)」「イメージ課題(イメージから動きへ)」「群一構成課題(群・構成からイメージへ)」等があげられる。^(6,7)「運動課題」は「『身体—運動』の要素、『運動—変化—連続』の要素から導きだされ、運動を単なる運動に止まらず、運動以上のものとして表現的性質を内包するものとなるように」⁽⁷⁾設定される。「イメージ課題」は「題材やイメージを与えて動きに接近する課題の提示で、イメージと動きを結びつつ、多様化し、構造化する力を開拓する学習法である。」⁽⁷⁾「群一構成課題」は群舞の表現特性から導きだされている。⁽⁷⁾これらの課題は「発達段階に応じて選択され、循環前進的に進められる」⁽⁷⁾ものである。

(2) ダンス課題学習の原則

「課題学習では、それぞれの課題をよりどころにダンスの本質、ダンスの全体像へのより容易な接近をはかり、今、生徒の持っている力からスタートして、踊り、創り、観る技能を高め、活性化された学習として機能することをめざしている。いずれの課題も二つ以上の対極の性質をもつ運動の連続体から設定される。」⁽⁶⁾課題学習の原則は、提示された課題から、学習者個人を主体として「動きの極限化への挑戦(対極の動きを最大限に強調する等)と多様化への追求(速度や方向を変える等)をはかること」⁽⁶⁾であり、「さらに、各自のやり方による独自性のある表現を引き出すことを企図している。課題学習は、1時間毎に新しい課題を学習する1時間完結型の段階から、1時間の学習を積み重ねて小作品づくりへ進める段階、そして最終的には自主的に計画をもって単元を進め、作品創作に至る段階へと発展的に考えられている。」⁽⁶⁾(図1, 2)

2. 研究の目的

平成元年、学習指導要領改訂の告示がなされ、特に中学校の体育分野での特徴として武道及びダンスの領域において、男女とも選択し履修できるようになるということがあげられる。従ってダンスの授業が男女共修となり幅広いダンス学習の可能性が開かれたと考えられる。しかし中学校期のダンスはこれまで主として女子の教材として位置付けられてきており、男女共修や男子のダンス学習という視点での指導実践・研究等があまり検討されていない。これまで体育学習指導のなかでは「ホイジンの文化論的な遊び論やカイヨワの社会学的な遊び論から見た運動の楽しさの検討」や「チクセントミハイの社会心理学的な領域からの運動の楽しさ」^(5,14)が検討されてきた。そして学習者の立場から運動の楽しさを捉え、それらの点から運動特性を明らかにした上で、学習内容を再検討することの重要性があげられた。^(5,14,15)さらに学習者の内発的動機づけとして運動の楽しさが、効果的な指導法の手がかりとして取り上げられてきた。^(2,15)ダンスの授業においても、個に応じてダンスの特性に触れることができたという経験が、ひいては生涯にわたって自発的にダンスを選択する姿勢につながると思われる。

そこで本研究では改訂の内容を既実践し、検討を行っている男女共修のダンス授業(ダンス課題学習)を対象にして、学習者の立場からダンスの楽しさを捉え、単元を通してそれがどのように変容しているのかを明らかにする。その点から学習内容を検討し、さらに男女間の比較も加え楽しさの享受にみられる男女の特性を検討する。

3. 研究の方法

(1) 授業の概要(表2)

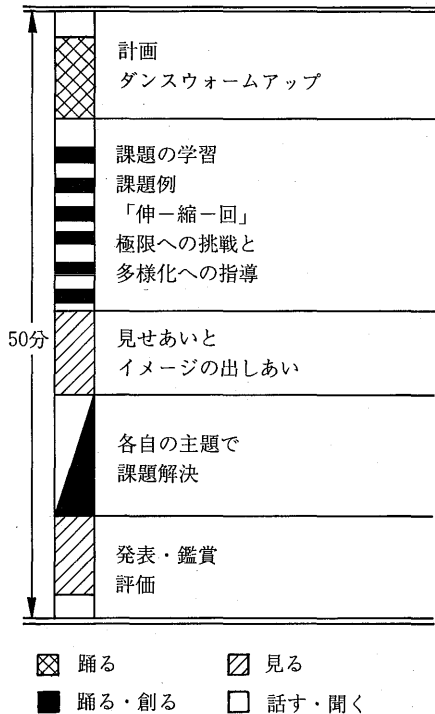
本研究で対象とした授業にはダンス課題学習が設定された。

(2) 授業の観察・収録の手続き

- 1) 対象 筑波大学附属中学校1年生 42名×5クラス (1クラス 男子22名・女子20名)
- 2) 期間 1988年10月～1989年3月
- 3) 場所 筑波大学附属中学校体育館及び育鳳館
- 4) 指導者 筑波大学附属中学校教諭
- 5) 授業時数 50分×16時間(週1時間)

課題学習——運動課題からイメージへ

課題 「伸びる・縮む・回る」



課題の学習	「伸びる・縮む・回る」 〈伸・縮・回〉〈伸・縮・回〉 〈伸・縮・回・止・止・止〉
	<ul style="list-style-type: none"> ○最大限の伸・縮への挑戦 ○速度や方向を変えて ○何かを感じて、自分のやり方で
出しあい	<ul style="list-style-type: none"> ○2交代で見せあい ○イメージの出しあい (運動からどんなイメージがわくか)
各グループの主題で	<ul style="list-style-type: none"> 各グループのイメージによる創作 ○3人組で、イメージを決め、3人で感じ合って創作する ○課題を生かして、イメージを強化する
発表・鑑賞・評価	<ul style="list-style-type: none"> 見せあい ○課題から、それぞれ新しいイメージのひろがりが見られたか ○どの組にも個性が見られたか

(ウォーム・アップの部分省略)

図1 1時間の学習のモデルと展開例(日本女子体育連盟提案グループ資料)

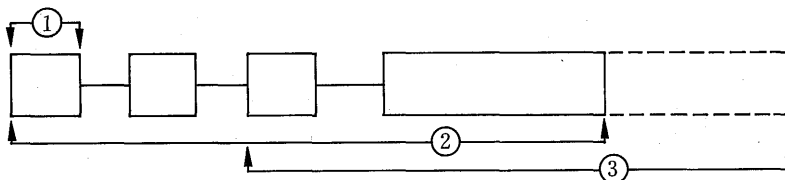


図2 課題学習の段階の発展(日本女子体育連盟提案グループ資料)

6) 授業記録 ①授業観察記録②VTR収録

7) 学習記録 ①学習者の個人ノート
②質問紙調査(学習開始前, 学習中期, 学習終了後)

(3) 授業分析の方法

「学習の成果に着目した分析」^(12,13)を中心とし実態把握のため学習開始前から学習終了後の男女の意識の変容過程を分析した。

分析項目 1) 学習課題に対する理解という意味での成果

調査①各学習課題における自己評価

の変容

2) ダンスへの接近という意味での成果

調査②ダンスの好嫌度の変容

調査③ダンスの楽しさの変容

3) 男女間の理解という意味での成果

調査④動きの表現性の捉え方の変容

調査⑤グループ活動の様相

調査⑥学習グループ形態についての希望の変容

特に本研究では 2) —③ダンスの楽しさの変容を中心に考察を進める。

(4) 調査の手続き

1) 予備調査 (1987年度)

ダンスの楽しさについての自由記述による調査結果に検討を加え以下のように分類した。

- ①表現 ②運動欲求充足 ③達成
- ④協力 ⑤発見 ⑥自由 ⑦独自性
- ⑧発表 ⑨鑑賞 ⑩変身 ⑪音楽(リズム)

2) 本調査 (1988年度)

上記全11カテゴリーについて各3項目、計33項目5段階評定から成る質問紙を作成し、それを用いて学習前期、学習中期、学習終了後の3回にわたって調査を行った。得点化にあたっては「非常にそう思う」には5点、「そう思う」には4点、「どちらでもない」には3点、「そう思わない」には2点、「全くそう思わない」には1点を与えた。学習過程に伴う楽しさの変容を明らかにし、さらに男女間の比較を行った。

(5) 統計的処理の方法

対象者全員(男女)の5段階評定から各回毎に主因子解法による因子分析を行い、固有値1.00以上の因子を抽出した。0.400以上の因子負荷量を示した項目を用いて、因子の解釈を行った。さらに各因子の因子得点を算出し、男女間の比較、グループ形態による男女間の比較のためt-検定を行った。なお、本研究の統計解析は、すべて筑波大学学術情報処理センターのFACOM-780のSPSSを用いた。

4. 授業実践事例

学習内容(ダンス学習課題)の選択の視点として、序論で述べた原則に基づき、さらに学習者にとって(I)興味関心が持て、生活体験や感動があり、内容自体に新鮮さや創造力をかきたてるような期待感のあるもの(内発的動機づけ)(II)動きの特徴が見出しやすく、イメージと動きの関係がつかみやすいもの(III)個性に応じ多様なとらえ方ができ、発展性のあるものが基準とされている。学習目標は、単元の前半(1987年度1~10時間/1988年度1~9時間)については「自分のやりたいいろいろなイメージで、今持っている力を使って多様な表現を楽しむ(即興を楽しむ)⁽¹¹⁾」となっており単元後半(1987年度11~14時間/1988年度10~15時間)は「自分達の一番やりたいイメー

ジで動きを工夫し、まとまりのある表現をつくって楽しむ(作品を楽しむ)⁽¹¹⁾」となっている。

1987年度の単元構成(表1)による授業実践の結果、導きだされた問題を再検討し、新しく1988年度の単元構成(表2)が試案された。

5. 結果と考察

学習前期、学習中期、学習終了後の3回にわたりダンスの楽しさについての33項目から成る質問紙により調査を行った結果を以下に考察する。

(1) 因子の解釈

対象者全員の5段階評定から各時期毎に主因子解法による因子分析を行った結果、次のような因子が抽出された。(表3, 4, 5)

1) 学習前期(1~4時間終了後)

第1因子は「変身」「独自性」の因子負荷量が高い。次いで「自由」(自由に動ける、自由に創作できる)、「表現」(心の底から自分を表現できる)「運動欲求充足」(体を思いきり動かす)が高い負荷を示している。そこで、自由に思いきり動いて自分らしさを表現する意味での「独自の变身」と解釈する。

第2因子は「協力」と「達成」(ひとつの作品をつくりあげること)の負荷量が高いので「協力・達成」と解釈する。

第3因子は「音楽」「運動欲求充足」(体を思う存分動かす)の負荷量が高い。さらに「達成」(うまく踊れる、完成する)も関連しているので、音楽にうまくのって動くという意味で「音楽との一体化」と解釈する。

第4因子は「発見」(今まで知らなかった動き)、「自由」の負荷量が高い。また「表現」(工夫しだいでどんなことでも)も関連しているので、「自由」に「表現」できるなかでの「発見」ととらえ、「自由に表すなかでの発見」と解釈する。

第5因子で高い負荷量を示すのは「鑑賞」の項目のみだが、なかでも(人のダンスを見て「なるほど」と感動する)、(いろいろな人の考え方がわかる)の項目が高いので「鑑賞(共感、感嘆)」と解釈する。

第6因子で高い負荷量を示すのは「運動欲求充足」(体を思う存分動かす)、(エネルギーを全部燃焼する)の項目のみなので、「運動欲求充足」と解釈する。

第7因子で高い負荷量を示すのは「鑑賞」の項

表1 単元の構成 (1987年度)

時間	課題	授業の展開	グループ構成
1	走-止 ○○にびっくり	・いろいろなスポーツをリズムに合わせて動いてみよう ・走-止 (極限化と多様化) 「○○にびっくり」 ・一番気に入った動きを一つ見つける	2人
2	オリエンテーション	・前年度の作品鑑賞 (VTR) ・ダンス学習のねらい、約束と心構え、学習ノート	
3	走-跳-一回	・跳 (極限化と多様化) 強く、激しく、そとやさしく ・走-跳 ・一番気に入った動きの流れを一つ見つける	4~5人
4	噴火	・走-跳-一回の発展 ・三原山噴火の写真を見せる ・走-跳-一回 走-跳-跳-跳-一回 (人間落岩) ・一番いいところを抜き出して 跳・跳・跳 ・「不気味な予感、そして…」	5~6人
5	伸-縮	・伸-縮 (極限化を多様化) (直線的に、曲線的に) ・スローモーションで ・コマ送り ・一番気に入った動きの流れを一つ見つける	2~3人
6	機械	・伸-縮の直線的な動きの発展 ・音楽からイメージを広げる ・「スライッパオン→ゆっくると→だんだん早く →もつともつと早く→そして…」 ・「エネルギーもうない! あーあ、壊れちゃった」	5~6人
7	走-止 (尻) ○○に追われて ○○をさがせ	・360°見回す ・走-見 走-見 走-見 走-見 見・見	2~3人
8	対立	・走-見の発展 ・走-止 走-止 睨み合って近づくと 渦を巻いて走る-止-止-止	10人
9	固-離	・手をつないでぐちゃぐちゃに固まる 固-離-固	10人
10	祭り	・人数構成を手がかりに	
11 14	クラス作品づくり	・○○の世界 クラスカラーでいろいろな	
15	クラス内発表会		
16	単元のまとめ	・他クラスの作品鑑賞 (VTR) ・レポート	

主な生徒のイメージ	(題名抜粋)
車猫 おおげ	鏡
タンホポの綿毛	かびの胞子
火山 怒り	日航機墜落
おんぼろ洗濯機	印刷工場
ハリコブター	コンピュータ
オルゴール	おもちゃ箱
電子楽器	未完成のロボット
農耕機	遊園地
異次元の入り口	へそくり
コンタクトレンズ	秘宝
ドレッシング	刑事と泥棒
スクラム	ウルトラマンと怪獣
関ヶ原のキョウシ	(人間とキョウシ)
アメーバー	満員電車
電磁石	たんぼぼ
砂鉄	氷
あさがお	洗剤の酵素
	けんか
	ベルトコンベアー
	消防車
	菌車
	ダム水力発電所
	パートナー
	金
	火と水
	白と黒
	ゴム
	蜘蛛の巣
	細胞
	ラグビーのスクラム
	バチンコ
	ストリートファイター
	中国
	エジプト
	戦争
	地球
	忍者
	花火
	龍
	宇宙の誕生
	惑星の誕生
	スターウォーズの混乱
	コスモファイターズ
	スペースシャトル爆発
	ブラックホール
	消滅

ゲームの世界 (ぶつかる)	風雲たけちよ おはじき	バチンコ	ビリヤード
世界紀行 (一番やってみたい好きなこと)	エスキモー インディアン スリラー	中国	エジプト
冒険 (跳・転・はう・あ)	戦勝 西部	ドラゴンへの道	地獄
祭り (祭り)	祭り囃子が聞こえる 山車 獅子舞い みこしだわっしょい!	大鼓 屋台	花火
宇宙 (ぶつかる)	宇宙の誕生 スターウォーズの混乱 スペースシャトル爆発 消滅	惑星の誕生	スターウォーズ

表3 ダンスの楽しさにおける因子負荷量 学習前期

変 数 名	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	F 7
32) そのものになりきって動ける	.610						
30) 心の底から自分を表現できる	.565						
19) いろいろな人、もの、風景になれさせる	.543						
12) 個人独特のものが出せる	.537						
2) 自分が自分でないものになれる	.534						
29) 自分の好きなように、自由に創作できる	.514						
14) 体を思いきり動かしのびのびした気持ちになれる	.514						
22) ひとりひとりの個性を表出できる	.513	.434					
1) 自分の個性を思いきり出せる	.486						
15) 形やかっこうにこだわらず、自由に動ける	.456			.420			
21) ひとつの作品をつくりあげること		.617					
17) グループで協力しあい、一丸となれる		.568					
20) 友達と意見を出し合いながら創ること		.554					
28) 最後に発表して、互いに見せ合うこと		.452					
24) 音楽によって体を動かすこと			.780				
31) リズミカルに楽しく動くこと			.609				
3) リズムによって踊れる			.542				
26) 体を思う存分動かし、気持ちのよい汗を流せる			.495			.429	
27) 完成したダンスがうまく踊れたときの感動			.430				
8) ひとつのダンスが完成したときの喜び			.418				
10) 今まで知らなかった動きを発見できる				.619			
11) 規則がなく、すべてが自由にできる				.502			
7) 工夫しだいでどんなことでも表現できる				.461			
23) 人のダンスを見て「なるほど」と感動する					.589		
9) いろいろな人の考え方がわかる					.556		
33) エネルギーを全部燃焼できる						.566	
18) 他人の面白い動きをみること							.548
貢 献 度 (%)	12.2	9.8	9.0	7.4	4.5	3.9	1.2
貢 献 量	4.0	3.2	3.0	2.4	1.5	1.3	0.4

目のみで、第5因子と異なり（他人の面白い動きをみること）の項目が高いので、「鑑賞」のなかでも、「個性的・美的なものにふれる」側面とし、「鑑賞（審美的満足）」と解釈する。

2) 学習中期（9時間終了後）

第1因子は「変身」「表現」「運動欲求充足」の負荷量が高く、次いで「発見」（気に入った動き、1つ1つの動きを見つめる）、「自由」（自由に動ける）、「音楽」（リズミカルに楽しく動く）が高い負荷を示している。これは特に「変身」「表現」と「運動欲求充足」が関連していると思われるの

で「変身（運動・表現）」と解釈する。

第2因子は「独自性」の負荷量が高い。その他に「自由」（自由に創作できる、自由に動ける）、「発表」「表現」がみられる。これは、自由に工夫できることから自分たちの「独自性」を見だし、またそれを他人に承認される喜びという意味より「独自性の表出」と解釈する。

第3因子は「音楽」「運動欲求充足」の負荷量が高いので、「律動運動」と解釈する。

第4因子は「鑑賞」「発見」（今まで知らなかった動き、1つ1つの動きの発見）の負荷量が高い。

表4 ダンスの楽しさにおける因子負荷量 学習中期

変 数 名	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	F 7
30) 心の底から自分を表現できる	.673						
32) そのものになりきって動ける	.667						
33) エネルギーを全部燃焼できる	.638						
19) いろいろな人, もの, 風景になれさせる	.580						
7) 工夫しだいでどんなことでも表現できる	.534						
15) 形やかっこうにこだわらず, 自由に動ける	.526						
26) 体を思う存分動かし, 気持ちのよい汗を流せる	.515		.462				
16) 気に入った動きを見つけられる	.471						
2) 自分が自分でないものになれる	.454						
4) 自分の考えていることを体で表現できる	.439	.403					
31) リズミカルに楽しく動くこと	.427						
12) 個人独特のものが出せる		.737					
22) ひとりひとりの個性を表出できる		.529					
1) 自分の個性を思いきり出せる		.513					
29) 自分の好きなように, 自由に創作できる		.499					
13) 自分のアイデアがみんなに認められること		.486					
11) 規則がなく, すべてが自由に行える		.429					
24) 音楽によって体を動かすこと			.776				
3) リズムによって踊れる			.594				
14) 体を思いきり動かしのびのびした気持ちになれる	.440		.447				
9) いろいろな人の考え方がわかる				.639			
18) 他人の面白い動きをみる				.571			
10) 今まで知らなかった動きを発見できる				.530			
23) 人のダンスを見て「なるほど」と感動する				.461			
25) 1つ1つの動きを発見していくこと	.403			.426			
21) ひとつの作品をつくりあげること					.627		
20) 友達と意見を出し合いながら創ること					.521		
17) グループで協力しあい, 一丸となれる					.456		
27) 完成したダンスがうまく踊れたときの感動						.780	
8) ひとつのダンスが完成したときの喜び						.531	
5) できたものを発表し, 他人にわかってもらえる							.689
6) 男女が協力し合ってできる							.449
貢 献 度 (%)	14.8	10.1	7.6	7.4	6.0	5.9	4.6
貢 献 量	4.9	3.3	2.5	2.4	2.0	1.9	1.5

「鑑賞」からの発見という意味で、「鑑賞(発見)」と解釈する。

第5因子は「達成」(ひとつの作品をつくりあげること), 「協力」の負荷量が高いので, 「協力・達成」と解釈する。

第6因子で高い負荷量を示すのは「達成」のみでその中でも(ひとつのダンスが完成したときの

喜び)と(完成したダンスがうまく踊れたときの感動)の二つの側面があり, 「達成(創る・踊る)」と解釈する。

第7因子は「発表」(できたものを発表し, わかってもらえる)の負荷量が高く, 次いで「協力」(男女が協力し合ってできる)が高いので「発表・協力」と解釈する。

表5 ダンスの楽しさにおける因子負荷量 学習終了後

変 数 名	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6
1) 自分の個性を思いきり出せる	.651					
30) 心の底から自分を表現できる	.637					
4) 自分の考えていることを体で表現できる	.622					
32) そのものになりきって動ける	.593					
19) いろいろな人, もの, 風景になれさせる	.519					
17) グループで協力しあい, 一丸となれる	.515					
6) 男女が協力し合ってできる	.514					
5) できたものを発表し, 他人にわかってもらえる	.495					
2) 自分が自分でないものになれる	.482					
7) 工夫しだいでどんなことでも表現できる	.425					
20) 友達と意見を出し合いながら創ること	.423					
24) 音楽によって体を動かすこと		.689				
31) リズミカルに楽しく動くこと		.590				
26) 体を思う存分動かし, 気持ちのよい汗を流せる		.589				
3) リズムによって踊れる		.547				
33) エネルギーを全部燃焼できる		.532				
27) 完成したダンスがうまく踊れたときの感動		.523				
14) 体を思いきり動かしのびのびした気持ちになれる		.490				
16) 気に入った動きを見つけられる		.433	.408			
12) 個人独特のものが出せる			.668			
15) 形やかっこうにこだわらず, 自由に動ける			.664			
29) 自分の好きなように, 自由に創作できる			.610			
11) 規則がなく, すべてが自由にできる			.597			
13) 自分のアイデアがみんなに認められること	.407		.455			
22) ひとりひとりの個性を表出できる	.442		.446			
21) ひとつの作品をつくりあげること				.616		
9) いろいろな人の考え方がわかる				.564		
28) 最後に発表して, 互いに見せ合うこと				.514		
8) ひとつのダンスが完成したときの喜び				.511		
10) 今まで知らなかった動きを発見できる					.620	
25) 1つ1つの動きを発見していくこと					.512	
23) 人のダンスを見て「なるほど」と感動する						.557
18) 他人の面白い動きをみること						.514
貢 献 度 (%)	14.1	11.4	10.9	7.2	5.7	5.1
貢 献 量	4.7	3.7	3.6	2.4	1.9	1.7

3) 学習終了後 (15時間終了後)

第1因子は「表現」「変身」「協力」の負荷量が高く、次いで「独自性」(個性表出), 「発表」(他人にわかってもらえる, 認めてもらえる)が高い負荷を示している。これは主に「表現(変身)」と「協力」が関連しているとし「表現・協力」と解釈する。

第2因子は「音楽」「運動欲求充足」の負荷量が高い。また「達成」(うまく踊れたとき), 「発見」(気に入った動きを見つけられる)も関連しており, それらを含めて「律動運動」と解釈する。

第3因子は「自由」そして「独自性」が高い負荷を示す。その他として「発表」「発見」がみられる。自由に独自性を表し, 承認される喜びと

いう意味で、「自由な独自性の表出」と解釈する。

第4因子は「達成」（ひとつのダンスが完成したときの喜び）や（ひとつの作品をつくりあげること）の負荷量が高く、またその過程で（いろいろな人の考え方がわかる）、「発表」（互いに見せ合うこと）が高い負荷を示す。そこで「達成（創る）」と解釈する。

第5因子で高い負荷を示すのは「発見」のみであり、その内（今まで知らなかった動きを発見できる）、（1つ1つの動きを発見できる）という項目より「動きの発見」と解釈する。

第6因子で高い負荷を示すのは「鑑賞」のみであり、その内（他人の面白い動きをみること）、（人のダンスを見て「なるほど」と感動する）という2つの側面の項目より、「鑑賞（共感・審美的満足）」と解釈する。

以上のダンスの楽しさにおける因子の解釈は、さらに学習者の立場から捉えたダンスの特性⁽⁸⁾として解釈可能である。学習前期の因子の解釈が、学習中期には、より複合化された形でみられる。（2）学習過程に伴う楽しさの検討（調査時期間の比較）

ダンスの楽しさにおける因子の変容を（表6）に示す。

以下、学習者のとらえるダンスの楽しさが、学習過程に伴いどのように変容しているかを考察する。

1) 学習前期（1～4時間終了後）

学習前期にはまず「独自の変身」と、仲間と共に作品を完成させるというグループ活動の楽しさがある。また音楽に内包されるリズムにうまく乗ること、自由のなかの「自己決定」⁽²⁾などの楽しさがみられる。他者の変身を見て楽しむことも特徴である。そして学習前期の段階では力一杯運動するというのもダンスの楽しさの要因であるといえる。

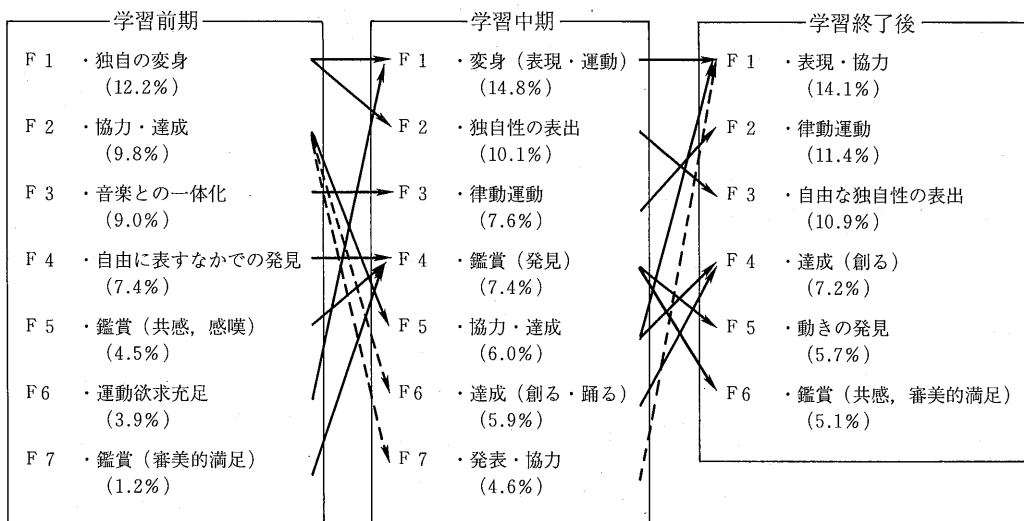
2) 学習中期（9時間終了後）

学習中期は学習前期から、さらにダンス課題学習をすすめた段階である。学習中期では、学習前期での「変身」が、「変身」することで何かを「表現」する段階に移行していると思われる。そして学習前期に比べ表現と運動との関連がより強くみられるのが特徴である。また前期よりもさらに個性的な独自性を発揮することに楽しさを見出している。この点については毎時間の、イメージをとらえた動きの学習の深まりと解釈できる。

「音楽との一体化」は、さらにリズムカルな運動パターンを体験することの楽しさに移行していると思われる。

そして他者の表現を新鮮さと驚きの目をもって見て楽しむことから、見ることによって他者のアイデアや動き、個性を「発見」することの楽しさを感じるようになる。自分とは異なる他者の表現にふれる事で、自己の表現の多様化につながる段

表6 ダンスの楽しさにおける因子構造の変容



階といえる。

また、グループで協力しながら、ひと流れのまとまった動きを創り発表する過程での楽しさ、またそれをつくりあげる、うまく踊りきるという達成感等がみられる。しかし学習前期から学習中期への「協力・達成」因子の変化に見られるように、グループというよりも比較的個人が独自のダンス表現を楽しむ過程であると解釈できる。

以上の約9時間にわたるダンス課題学習、つまり各課題ごとにひとまとまりのイメージをとらえた動きを創り見せ合うことの深まり、学習の成果がみられるといえよう。

3) 学習終了後 (15時間終了後)

表現することでも、特に仲間と協力して表現することに楽しさを見出しているのが特徴である。個の表現と、そこからさらにグループ表現へと広がりつつあると考えられる。これは固定グループで数時間、創作活動した成果であると思われる。また「動きの発見」、発見した動きやアイデアに自由に「独自性」をもたせること、そして最後に作品を完成させる「達成」など、ひとつの作品を創る全過程に楽しさを見出しているといえる。

単元を通して学習者が享受するダンスの楽しさはダンス課題学習の段階や学習内容・学習目標に沿って変容しているといえる。

(3) 男女間の比較

以下、ダンスの楽しさにおける男女間の比較について考察する。(図3)

1) 学習前期 (1~4時間終了後)

第3因子「音楽との一体化」、第5因子「鑑賞(共感、感嘆)」、第7因子「鑑賞(審美的満足)」において、それぞれ0.1%、0.1%、1%水準で男女間に有意差がみられる。

この結果から、「音楽との一体化」と「鑑賞」については男子の方が楽しさの程度が高いことがわかる。

また統計的な処理では明らかにされていないが、「運動欲求充足」については、女子の方が楽しさの程度が高いようである。「協力・達成」「自由に表す中の発見」については男女間にほとんど差はないといえる。

2) 学習中期 (9時間終了後)

第3因子「律動運動」、第4因子「鑑賞(発見)」において、それぞれ0.1%、5%水準で男女間に有意差がみられる。

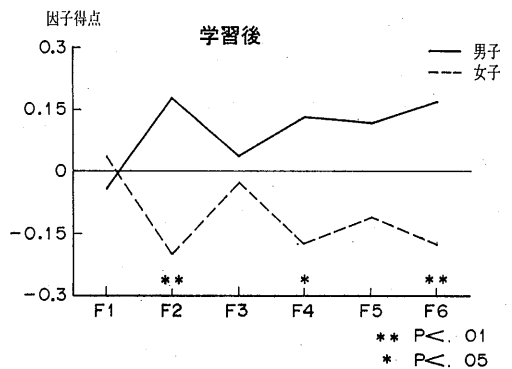
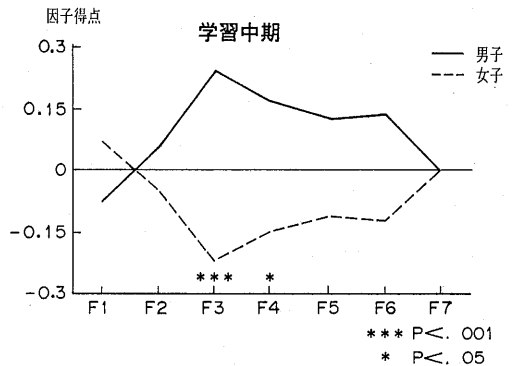
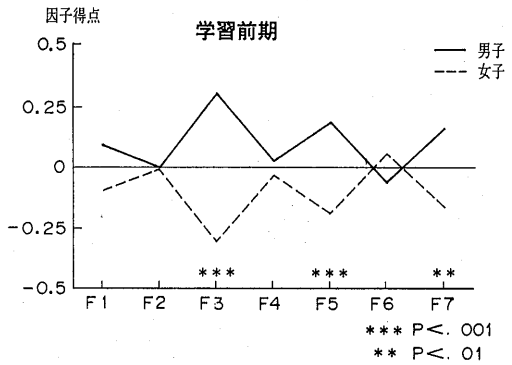


図3 平均因子得点にみられる楽しさの男女比較

この結果から、「律動運動」と「鑑賞(発見)」については、男子の方が楽しさの程度が高いことがわかる。

また統計的な処理では明らかにされていないが、「変身」については女子の方が楽しさの程度が高いようである。

「発表・協力」については男女間にほとんど差はないといえる。

3) 学習終了後 (15時間終了後)

第2因子「律動運動」、第4因子「達成(創る)」、第6因子「鑑賞(共感、審美的満足)」においてそれぞれ1%、5%、1%水準で男女間に有意差がみられる。

この結果から、「律動運動」と「鑑賞」については男子の方が楽しさの程度が高く、新たに「達成(創る)」についても男子の方の楽しさの程度が高いことがわかる。

統計的な処理では明らかにされていないが、「表現」については、女子の方が楽しさの程度が高いようである。

さらに、グループ創作学習時の学習グループ形態により学習後の男女の楽しさに変容がみられるかを検討した結果、男女混合グループの成員である男子と男子グループの成員である男子の間、男女混合グループの成員である女子と女子グループの成員である女子の間に有意な差は見られなかった。

以上の結果について、心理学の分野では「達成」動機の性差について「一般低な達成動機に男女差はみられず、女の子の方が弱いとはいえない。」⁽¹⁾としたり、また「社会的な要因などから差がみられる」としている見解もある。さらに「一般に男子の場合には対象それ自体に興味と意欲を示すのに比べて、女子の達成活動は他人指向的な傾向があること」⁽¹⁷⁾も指摘されている。本研究の結果では、「協力・達成」因子においては男女間に有意な差が見られなかったことから、男子は他人との協力というよりも、創作活動自体と達成に関連があると思われ、後者の見解とほぼ一致したとみられる。また体育授業における楽しさの要因分析でも「男子は自己の能力を積極的に発揮することに楽しさを見出しているのに対し、女子では心理的な安定をもたらす事柄によって楽しさを得ようとする」⁽⁴⁾と、同様の傾向が指摘されている。

6. 結 論

(1) 男女共修によるダンス授業においてダンス課題学習が実践された結果、学習者が享受したと思われるダンスの楽しさとして次の因子が抽出された。

学習前期は、F1「独自の変身」、F2「協力・達成」、F3「音楽との一体化」、F4「自由によ

す中での発見」、F5「鑑賞(共感、感嘆)」、F6「運動欲求充足」、F7「鑑賞(審美的満足)」の7因子が、

学習中期は、F1「変身(運動・表現)」、F2「独自性の表出」、F3「律動運動」、F4「鑑賞(発見)」、F5「協力・達成」、F6「達成(創る・踊る)」、F7「発表・協力」の7因子が、

学習終了後は、F1「表現・協力」、F2「律動運動」、F3「自由な独自性の表出」、F4「達成(創る)」、F5「動きの発見」、F6「鑑賞(共感、審美的満足)」の6因子がそれぞれ抽出された。

学習前期から学習中期にかけては、特に因子が複合化されていることから、楽しさが多様に混在していると考えられる。この点については指導内容、指導方法に起因するのか、あるいは学習者側の捉え方が変化しているのか、本研究の結果からは言及できない。

しかしながら、学習過程に伴った望ましい楽しさの変容がみられることから、学習者は個に応じてダンスの特性に触れることができたのではないかと考えられる。中学校期における男女共修によるダンス授業においてダンス課題学習が設定されたことは適切であったといえる。

(2) 学習者が享受したダンスの楽しさについて、男女比較を行ったところ

学習前期は、F3「音楽との一体化」が0.1%、F5「鑑賞(共感、感嘆)」が0.1%、F7「鑑賞(審美的満足)」が1%の水準で、

学習中期は、F3「律動運動」が0.1%、F4「鑑賞(発見)」5%の水準で、

学習終了後は、F2「律動運動」が1%、F4「達成(創る)」が5%、F6「鑑賞(共感、審美的満足)」が1%の水準で、それぞれ男子の方が有意に楽しさの程度が高いことが明らかになった。

これらの結果をふまえ、ダンス課題学習の指導実践において、男女の性の特性に応じた課題の提示、導入の方法等が考慮されることが望ましいと思われる。また広くは、個性に応じた適切な指導が必要とされよう。

7. 今後の課題

本研究の結果は、ダンスにおける他の授業形態との比較がされていないため、ダンス課題学習の独自の結果であると考えられる。今後、他の授業形態と比較・検討する必要がある。また同授業形

態で、他の指導者による結果等も合わせて検討していく必要があると思われる。

引用・参考文献

- 1) 福富 護 (1983) : 性の発達心理学. 福村出版.
- 2) 伊藤豊彦・織奥信男 (1988) : 体育学習における児童・生徒の楽しさを規定する要因と教師の認識. 体育学研究, 33 : 123-33.
- 3) Jean C and Peter L (1969) : Creative Dance for Boys. The Gresham Press, London, pp. 9-13.
- 4) 賀川昌明 (1984) : 体育授業における楽しさの要因分析—学習者の個人特性と因子別Z得点との関係について—. 徳島大学教養部紀要 (保健体育) 13 : 19-32.
- 5) 嘉戸 脩 (1988) : 運動と楽しさ. (編) 宇土正彦「体育科教育法入門」, 大修館書店, 東京, pp. 40-48.
- 6) 川口千代 (1985) : 舞踊学研究が教える現場実践への提言. 体育の科学, 35-1 : 60-64.
- 7) 松本千代栄 (1982) : 舞踊課題と創作学習モデル—高等学校における実験授業研究—. 日本女子体育連盟紀要 81 : 1-20.
- 8) 松本千代栄 (1985) : ダンス表現 学習指導全書. 大修館書店, 東京, pp. 64-79.
- 9) 松本千代栄 (1982) : 舞踊課題と課題解決学習. 女子体育, 24-3 : 7-12.
- 10) 松本千代栄 (1982) : 課題設定と課題解決学習運動の質と感情価. 女子体育, 28-3 : 7-12.
- 11) 中村なおみ (1990) : 保健体育科における男女共修授業の試み—ダンスにおける課題学習とその指導—. 筑波大学附属中学校研究紀要 42 : 35-59.
- 12) 中村なおみ・東原芳美 (1989) : ダンス学習指導における実践的研究 (2) —中学生を対象とした男女共修の試み—. 日本体育学会第40回大会号 p. 825.
- 13) 西 順一 (1986) : 授業研究を有効にするための研究手続き. 学校体育 39-9 : 29-34.
- 14) 島崎 仁 (1990) : 運動の特性と楽しさ. (編) 松田岩男ら「新しい体育授業の展開・総説編」, 大修館書店, 東京, pp. 115-25.
- 15) 宇土正彦 (1986) : 体育授業の系譜と展望. 大修館書店, 東京, pp. 33-52.
- 16) 若松美黄 (1983) : ダンス 現代スポーツコーチ実践講座 26. ぎょうせい, 東京.
- 17) 依田 明 (1976) : 発達心理学. 大日本図書, 東京.